令和7年度　学校評価総括表　　【伊丹市立荻野小学校】

教育目標	笑顔あふれ　明日も行きたい学校　～かしこく あたたかく たくましく 自立して生きぬく児童の育成 ～
重点目標	①知性にあふれ 正しく判断できる人　②心豊かで 品格のある人　③健康で 行動力のある人

施策	実施施策の目標	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携 ④情報活用能力の育成 ⑤英語教育の充実 ⑥デジタル化の促進	〇既習事項を活用する 課題解決の見通しをもつ 課題を見つけ挑戦する ①個人の興味や関心、役割に応じて、学習の個性化を図るとともに、多様な集団で協働的に問題解決に取り組む授業作りをすすめる。 ②基礎・基本の確実な定着を図る。 ③保護者や地域との連携をすすめる。 ④情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度の育成。 ⑤英語学習に対する興味関心や意欲の向上を図る。 ⑥授業や学校の運営に関して、ICT活用の推進を図る。	・学ぶ必然性のある授業や教科横断的な単元学習の実施。 ・子どもの実態に応じた経験的カリキュラムの実施。 ・1人1回の校内公開授業の実施。 ・授業内容に基づいて朝学習や補充学習で関連する既習事項の復習を行うとともに、指導においても学年間、領域内でのつながりを意識して指導し、既習事項の確かな定着を図る。 ・学年懇談会の実施や「家庭学習の手引き」の配布をとおした家庭学習の進め方の共有。 ・学校行事や各学年の学習に、地域の方が参画する機会を設ける。 ・タブレットの操作などにおいて、情報活用能力を高める。 ・授業において、情報モラルや適切な活用を意識させる。 ・専科教員・ALTを活用し、コミュニケーションを取り入れた内容を行う。また、書く内容も取り入れ、英語力の向上をめざす。 ・ICT機器の活用を取り入れた、わかる授業の創造やタブレット端末を利用した学習支援の充実を図る。	・児童アンケート「生活科や総合的な学習の時間等において、自らすすんで友だちと協力しながら学習に参加している」において、参加していると回答した割合が90%以上になる。 ・学期に1回、カリキュラムチェックを実施する。 ・各教員が授業公開を実施する。 ・児童アンケート、「授業がわかりやすい。」において、わかりやすいと回答した割合が90%以上になる。 ・児童アンケート「家での勉強はできましたか。」において、できた（宿題・自主学習・読書など）と回答した割合が90%以上になる。 ・地域の方の参画による、学校行事や各学年の学習を進められている。 ・児童アンケート「授業の中でタブレット、スクールタクトを使うことができる。」において、肯定的に回答した割合が　80%以上になる。 ・会話を取り入れた活動やデジタル教材、ICTを活用することで、楽しんで、意欲的に取り組むことができる。 ・教職員アンケート「授業、校務において、ICT機器の活用を意識している。」において、行っていると回答した割合が80%以上になる。	B	・児童アンケート「生活科や総合的な学習の時間等において、自ら進んで友だちと協力しながら学習に参加している」において、肯定的に回答した割合は90%と目標を達成できた。 ・学期に1回のカリキュラムチェックを実施できた。各学年の実践が蓄積されてきている。 ・校内における授業公開は、概ね各教員1回程度実施できた。 ・児童アンケート「家での勉強はできましたか。」において、できた（宿題・自主学習・読書など）と回答した割合が93%でおおむね達成できた。しかし、児童の実態をみると、学習の質、内容についてまだ課題が残っている。 ・宿題以外の自主学習等に取り組んでいる児童は少ない現状がある。 ・児童アンケート「授業の中でタブレット、スクールタクトを使うことができる。」において、肯定的に回答した割合が96%と目標を達成することができた。 ・1.17集会では、4年生がプレゼンテーションで発表をし、他学年に向けて、タブレットの効果的な活用方法を伝えることができた。 ・教職員アンケート「授業、校務において、ICT機器の活用を意識している。」において、行っていると回答した割合が90.9となり、目標を達成することができた。児童、教員ともに、タブレットやまなびポケット等のICTの活用に、利便性や学習効果を感じていることが分かる。 ・ICTの活用により、英語の発音練習や音楽に親しむなどの取り組みを行うことができた。 ・家庭でのタブレット管理（充電・破損）が不十分である。	・授業公開は、生活・総合にこだわらず、他教科の公開も可能としていき学びの場を確保し、学び合い、授業力の向上をはかる。 ・学年で誰がどの時間を公開するか予めしっかり計画しておく ・授業を担当している先生方は公開を目指す ・引き続き、授業研鑽にはげむ・今後、さらにICTを活用していく力が児童・教員それぞれに求められる。そのためにも、研修を進めていく。 ・教職員間でのICTの使用頻度に差があるため、スクールタクトを活用し、共有していく。 ・専科教員、ALT、JTEを活用し、会話を取り入れた活動、発表の場の設定をする。	・授業を参観すると、子どもが考えるための工夫が授業に取り入れられている。教師は、子どもの個々の興味や関心を大切にし、子どもの実態に応じて授業づくりを進めておられる。今後も引き続き、子どもたちが主体的に取り組む授業づくりを進めてほしい。 ・アンケート結果から、目標が達成されているといえる。ただし、どの程度できていれば「できた」といえるのか、基準をはっきりさせていくと良いのではないか。 ・現在は、アンケートを記名式で行っているが、より実態を把握したいのであれば、無記名で行うべきではないか。 ・タブレットの活用に関しては、達成目標に対して成果が見られた。 ・ICTの活用推進において、授業を見ても、先生がデジタル化の促進に力を注いでおられることが分かる。 ・引き続き子どもたちが積極的にICT機器を活用し、意欲的に取り組む授業づくりを推進していただきたい。 ・家庭でのタブレット利用に問題がある。動画視聴が長くなったりする問題への対策も考えていただきたい。

学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	○他者に共感し寄り添う 挨拶・姿勢等の習慣をもつ 命を守る判断・行動を取る ①思いやりの心や規範意識等、道徳実践力の育成を図る。 自尊感情を醸成し、人を大切に思う態度の育成を図る。 ②児童理解に基づく学級経営を行う。 いじめへの対応を早期に行う。 ③不登校児童への支援体制の確立。 ④校外学習などを通して、さまざまな体験や集団活動を実施する。	・道徳や人権の授業において、命や思いやりの心、規範意識等を大切にする子どもを育成するために、考え議論する道徳科の授業を実施する。 ・異年齢の活動の場を設定する。 ・アンケートをとる際に具体的な基準を伝える。 ・年に2回、アンケート調査を実施し、児童の声を聞く期間を設け、実態調査を行う。事例に応じて、職員全体で共通理解し、対応する。 ・不登校担当教員、不登校支援員を配置し、授業を進めながら不登校児童に対応できるようにする。また、不登校傾向の児童にとっての居場所として、おひさま学級を運営し、児童が安心して登校できるようにする。 ・児童の発達段階に応じたさまざまな経験をさせること、集団活動を通して、望ましい体験活動ができるように、計画・実施する。	・児童アンケート「自分にはよいところがあると思いますか。」、「いろいろな友だちの良いところを認めて大切にしていますか。」、「きまりを守って、ろうかを歩いていますか。」において、肯定的に回答した割合が80％以上になる。 ・アンケート実施後、各学年で児童の実態を共有し、今後の対応を検討する機会を設けている。 ・児童の実態を話し合う場を月１回以上設けている。 ・不登校担当教員を中心に、児童にとって過ごしやすい環境が整っている。 ・各学年において、日々の学習や校外学習などで、文化や自然に親しむとともに、地域に触れることで公衆道徳を学んだり、体験的活動をしたりする機会を設けている。	B	・児童アンケートの結果について、肯定的な回答は、「自分にはよいところがあると思いますか」→80％、「いろいろな友だちの良いところを認めて大切にしていますか」→94％、「きまりを守って、ろうかを歩いていますか」→84％となり、目標を達成することができた。しかし、休み時間に廊下を走る姿がまだ見られるなど、実態が伴っていない部分がある。 ・生活指導目標を月に一回職員にも周知し、児童への指導を行うことができた。児童が振り返りを行う機会を確保し、振り返りと合わせて、次の目標を確認できた。 ・アンケート実施後、いじめ対策委員会やケース会議を開き、情報共有、対応についての話し合いを行うことができた。また、必要であれば即効性をもって会を開き、問題解決に向けての対策を話し合うことができた。 ・児童について、月に一回職員全体での共通理解ができているため、対応が素早くできた。 ・不登校傾向がある児童が過ごす場所については、不登校加配教員に加えて支援員がいるおかげで、安定した「おひさまルーム」の運営ができている。不登校児童の人数については増えていないが、状況が深刻化している児童もいれば、登校時間や回数が増えている児童もいるなど、様子については様々である。改善を続けていくために、来年度もこの役割の教員が不可欠である。 ・50周年行事をはじめとして、体験的活動を意図的に組み込むことができた。体験を通して、外部の人との関わり方などを知ることができた。	・道徳の授業の充実を引き続き図っていく。授業の中で、考え、議論するような話し合いの機会を設ける。そして、現実に起こっている事実と学習を結びつけるような流れをつくる。 ・生活指導においては、児童がきまりを意識できるように、教職員間で指導方法を共有し、同じ指導方法ですすめていく。 ・きまりや約束を守って過ごすことについて、全校児童が意識できるように、児童会や各委員会と共に、全校での取り組みを考え、実施していく。 ・生活指導担当、生活指導部会を中心に、児童の様子を共有し、相談できる場を今後も確保していく。 ・肯定的に児童をみとることで、ほめる場面を増やし、児童の自己肯定感を高めていく。クラスに居場所があるということをその児童やクラス全体と共有し、安心できる環境をつくる。 ・体験活動については、今年度同様、意図的にカリキュラムへ組み込んでいく。	・自尊心が高まっている。 ・不登校児童については、今後も引き続き、地域や専門機関と連携を図り、児童が安心して登校できるよう取り組んでいただきたい。 ・体験活動に取り組み、今後も地域や学校外で活躍できるような取り組みを行ってもらいたい。 ・アンケート結果と実態が異なっている場合には、振り返って考えさせることも必要ではないか。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	○挨拶・姿勢等の習慣をもつ 粘り強く活動に取り組む ①健康な体づくり・体力の向上 ②クラブ活動の時間の実施 ③望ましい食習慣の推進	・健康的な生活習慣を身につけさせるために、保護者と児童に啓発する。 ・「ほけんだより」を用いた保健指導や保健委員会による保健広報活動を行う。 ・睡眠に関するアンケートを保護者に実施する。 ・体育の授業を活用し、荻野メソッドを行う。また、毎週火曜日の休み時間に体育倉庫を開放し、運動習慣の育成を行う。 ・長なわ大会や荻野なわとび検定など、体育委員会主導で学校全体の活動を行う。 ・スポセンでのプールの実施 ・3年生タイガースの出前授業 ・5、6年生を対象に、年間3回のクラブ活動の時間を実施する。 ・個々の児童が安心安全に、給食を食べられるよう、アレルギーについて、学級指導をする。 ・栄養教諭による「食の指導」を実施する。また、給食センターから送付される食に関する掲示物を掲示する。 ・給食委員会による広報活動を行う。	・「保健だより」を用いて、保健指導を月１回実施する。 ・児童アンケート、「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができていますか。」において、できていると回答した割合が80％以上になる。 ・児童アンケート、「運動することやスポーツを観ることが好きですか。」において、好きと回答した割合が90％以上になる。 ・クラブ活動を実施している。 ・季節の食材を知ったり、栄養について考えたりする機会を設けられている。 ・食に関するクイズや豆知識を学校放送で伝えている。	B	・「保健だより」を用いての保健指導は、月１回実施することができた。 ・児童アンケート、「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができていますか。」については、78％と目標を下回る結果となった。保護者アンケートの同様の項目では、肯定的な回答が90.3％となっており、大きな差が出る結果となった。 ・児童アンケート、「運動することや体を動かして遊ぶことが好きですか。」については、92％と目標を達成した。 ・サーキットトレーニングについては、提案しているものの、活用し切れていない現状がある。 ・長縄大会や荻野なわとび検定など、学校全体の活動を行うことができた。 ・クラブ活動は、年間3回実施することができた。 ・食に関する指導や出前授業を活用して、食や栄養について考える機会を設けることができた。	・「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができているかについては、講演会等、外部とも連携して、健康の大切さについて呼びかける機会を増やしていく。 ・早寝・早起き・朝ごはんなど、規則正しい生活ができていない子どもの調査が必要。 ・睡眠前にデジタル機器を触るときのデメリットを学び、睡眠への影響を学習する。 ・意欲は高いが体力は落ちているので、実際に身体を動かしているかの把握も必要である。 ・スポーツテストの結果より、投げる運動を取り入れたサーキットトレーニングの充実を図る。 ・運動することについては、体育の授業や体育委員会主導の活動を行うことで、運動を楽しむことができる環境を整えていく。 ・クラブ活動の運動系に参加している児童は半数以下なので、クラブの時間以外に身体を動かす時間を設ける。 ・委員会活動の中で残食を減らす取り組みをする。 ・保護者の方への食に関する啓発が必要である。	・保健だよりや保健指導、睡眠時間の調査などを通して、家庭にも啓発をされたことで、児童も保護者も規則正しい生活を送ろうとする意識の向上につながっている。 ・調査の結果などから、一部の児童の生活の乱れが気になる。今後もこの取り組みを進め、生活改善につなげてもらいたい。 ・低学年の時から、身体を動かす楽しさを味わい習慣づけていくことで、自ら運動し、体力向上につながるようになると良いと考える。ぜひ、今後も力を入れて取り組んでもらいたい。 ・食に関する指導を定期的に行うなど、食育の推進にも力を入れておられることが分かる。

	教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	○課題を見つけ挑戦する 　多様な視点から考える ①自ら課題を見つけ、考え行動できる児童を育てる。 ②児童や保護者の困り感に応じて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを活用する。 ③支援の必要な児童のニーズ把握、個に応じた学びの場や合理的配慮の提供を行う。	・キャリアパスポートを活用し、振り返りや自己評価をすることで、新たな学習意欲を高めたり、将来の生き方を考えたりさせる。 ・学級での様子、児童の相談に基づき、児童の困り感を把握する。また、家庭訪問や懇談を通して、保護者の困り感を把握する。 ・児童理解のための情報共有を行い、支援について検討し、校内の体制を整える。 ・個別の支援が必要な児童については、困り感に応じて通級指導を行う。 ・特別支援教育支援員を活用し、一斉授業の中で個別のサポートを行う。 ・必要に応じて、個別の指導計画を作成し、児童の実態を引き継ぐ。	・年に2回、キャリアパスポートを記入する際に、各学年に応じて、自分の成長を確認したり、将来に向けて考えを記入している。 ・児童アンケート、「自分は、将来の夢や職業について考えている。」において、考えていると回答した割合が80％以上になる。 ・担任が聞き取った困り感について、生活指導担当を中心にして学年や特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと共有する。 ・教職員アンケート、「支援の必要な児童について理解を深め、合理的配慮や基礎的環境整備を意識しながらともに認め合い、支え合う授業・学級・学校づくりを進めた。」において、あてはまる、ややあてはまると回答した割合が80％以上になる。	A	・全学年キャリアパスポートを活用することができた。 ・児童アンケートにおいて、85％の児童が将来や夢について「考えている」または、「少し考えている」と回答している。 ・生活指導担当を中心にして学年や特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと共有し、対応することができた。 ・必要に応じてスクールカウンセラーの来校数を増やすことができた。 ・「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答した回数は100％という結果が得られた。	・保護者との連携をとるためにも、学校通信や学年通信等を活用する。 ・学校外の講座や地域の方と触れ合うことで知らない仕事に触れる機会になると考える。これからも、働くことについて話を聞く会などをもって、将来について考えさせるようにする。 ・これからも担任の困り感には情報共有を行い、組織で幅広く対応できるようにする。 ・共有が関係者個々で行われることがあったため、全体で共有する場も設ける。 ・支援の必要な児童についての理解を深める研修を教職員の夏季研修で取り入れていく。 ・年度初めに教室環境の整備について全職員に周知する機会を増やす。 ・教職員の研修とともに、保護者も情報を得られる機会を作っていく。	・特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどを活用し、子どもの状況を共有し、支援の充実に努めておられる。 ・学校は、子どもや家庭に寄り添い、適切に取り組まれている。
	特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	○他者に共感し寄り添う ①支援の必要な児童に対して、指導内容・支援方法の相談を行う。 ②共に生き、共に学ぶ、インクルーシブ教育の推進を行う。	・支援の必要な児童の困り感に対する手立てについて、伊丹特別支援学校のコンサルテーションを通して学ぶ。 ・交流学級を生活の基盤とする。 ・交流学級の担任と特別支援学級の担任が連絡を密にし、意思疎通を図る。 ・教職員に対して、特別支援学級の参観（授業公開）を行う。 ・特別支援学級の子どもたちの共通理解を図るために、研修会を行う。 ・すべての児童が学びやすい授業づくりに取り組む。	・支援の必要な児童を含めて、すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業づくりを考えている。 ・児童アンケート、「学習や遊びで困っている人がいるとき、みんなで声をかけたり、助け合ったりしていますか。」において、していると回答した割合が　80％以上になる。 ・教職員アンケート、「特別支援教育校内委員会・校内教育支援委員会は、効果的に機能している。」において、していると回答した割合が90％以上になる。 ・教職員アンケート、「児童が安心して生活できるように学級担任とひろがり担任・通級担当等が連携している。」において、よくあてはまる、ややあてはまると回答した割合が90％以上になる。	B	・図や具体物、ICT機器を用いて全ての児童が学び合える授業づくりをめざして取り組むことができた。 ・「学習や遊びで困っている人がいるとき、みんなで声をかけたり、助け合ったりしていますか。」において、していると回答した割合が　79％で目標を下回った。 ・教職員アンケート、「特別支援教育校内委員会・校内教育支援委員会は、効果的に機能している。」において、していると回答した割合が90％であった。 ・教職員アンケート、「児童が安心して生活できるように学級担任とひろがり担任・通級担当等が連携している。」において、よくあてはまる、ややあてはまると回答した割合が96％で目標を上回った。	・年度初めに特別支援部からユニバーサルデザインについて研修をするが、年度途中にも声かけをし意識して指導を行っていく。 ・昨年度より数ポイント下回る結果だった。研究主題にもある「つながり」を学習だけでなく学校教育全体で意識し、年間を見通した学校・学級経営に取り組んでいく。	・児童一人ひとりに寄り添い、通級指導や特別支援教育を適切に行われている。引き続き、一人ひとりの児童を大切にし、認め合い、支え合う学校づくりに取り組んでいただきたい。
	教職員の資質向上 ①研修等の充実	○教職員の資質向上をめざした多様な研修を行う。	・授業力の向上に向けた授業公開の実施や外部講師等の招聘、グループワーク等、それに伴う研修会の実施	・それぞれのテーマに応じた研修を年間複数回実施する。	B	・時代のニーズ（幼少連携、カリキュラムマネジメント等）に応じた自主研修を実施することができた。 ・一人一授業の公開を実施し学び合うことができた。 ・他校の研究発表会に参加し学びを深める機会をもつことができた。	・これからも校内において授業を見合う習慣をもち学び合える集団を作っていくようにする。 ・その都度必要なことを題材としてミニ研修を実施し、その回数を増やしていく。 ・他校での研究発表会にも積極的に参加できるよう、呼びかけていく。	・研修に参加し、職員が課題に対して、みんなで意見を出し合い、前向きに取り組んでいるのが印象的であった。 ・保幼小中の連携、地域との連携が図られている。 ・今後も、現場の実態に応じた研究や研修を推進していただきたい。
	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	①学校運営協議会の活動の充実を図る。 ②学校情報の積極的な発信を行う。	・学校運営協議会と教職員とのつながりを深める。 ・学校だより、学年だよりを発行する。 ・学校ホームページを更新することによって、学校情報を積極的に発信する。	・教職員の研修に、学校運営協議会委員が参加する、合同の研修会を実施する。 ・保護者アンケート、「学校は、学校の情報を学校だよりや学年だより、ホームページやまなびポケット等を通じて、保護者に伝えている。」において、伝えていると回答した割合が90％以上になる。	A	・今年度も合同の研修会を実施することができ、地域の方と情報共有をすることができた。実際にレモンの木を寄付して頂き、子どもたちの学習に生かすことができた。 ・	・これからも協力して頂けるように、こまめに情報共有をして子どもたちのため協力していける関係作りをめざしていく。	・今後も参観日やオープンスクールなど定期的な授業公開や通信、ホームページなどによる積極的な情報発信に努めていただきたい。 ・保護者への啓発も行うことができている。

教育環境の整備・充実	<u>安全・安心な教育環境の充実</u> ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	①防災、安全教育の充実を図る。 ②登校指導を実施する。 ③交通ルールの説明、自転車安全教室を実施する。 ④安全安心な学校づくりを行う。 ⑤職員のやりがいを大切にした業務改善の実施	・火災、防犯、地震の避難訓練を学期に1回実施する。また、不審者対応訓練を年1回実施する。事前・事後指導で身の守り方を確認する。 ・学期に1回、校区の危険箇所に立ち、児童の登下校している様子を確認する。 ・警察の方に、自転車の乗り方や一年生への登下校指導をしてもらう。 ・長期休みの前などに、交通ルールについて、学校全体や学級でも指導する。 ・安全点検を月に1回実施し、学校施設や設備の安全・美化に努める。 ・労働安全衛生委員会を設置し、現場の声を聞き、業務改善を進めていく。	・児童アンケート、「避難訓練の時に、『お・か・し・も』のきまりを守って、自分で避難できますか。」において、できると回答した割合が90%以上になる。 ・登校の仕方で気になることには、すぐに対応し、全児童に指導することができる。 ・児童アンケート、「自転車に乗るときに、安全に気をつけることができていますか。」において、できていると回答した割合が90%以上になる。 ・安全点検をもとに、児童が安全に過ごす環境を整えることができる。 ・職員の発案による業務改善を組織として行うことができる。	B	・避難訓練を学期に1回行うことができた。 ・訓練の際には、マニュアルに沿って、対応の仕方を考え、実際に行動することができた。昨年度の課題も事前に共有することで、よりよい対応を行うことができた。 ・児童アンケート、「避難訓練の時に、『お・か・し・も』のきまりを守って、自分で避難できますか。」において、97%と目標を達成することができた。 ・普段の登下校については、道を広がって歩いたり、横断報道のないところで横断したりするなど、一部ルールを守れていない児童がいる。 ・児童アンケート、「自転車に乗るときに、安全に気をつけることができていますか。」において、89.2%と目標を若干下回る結果となった。児童の実態としては、数字以上に、安全意識ついて課題があるように見える。 ・労働安全衛生委員会の回数を重ねることで、業務改善を進めることができた。	・引き続き3年生で警察による自転車教室を開催し正しい乗り方やひそんでいる危険性について学習する。また保護者にも広く呼びかけていく。 ・自転車の乗り方や登下校時の道路の歩き方については、荻野小学校区の地区安全マップや危険箇所の写真などを活用し、指導を行っていく。 ・保護者のみなさんや安全見守りボランティアの方々と児童の交通安全における課題を共有し、家庭や地域でも声かけをしてもらえるよう取り組んでいく。	・定期的な避難訓練の実施など、学校全体で防犯・防災教育に取り組んでおられる。 ・登下校時の歩き方については、家庭、地域にも働きかけて、児童が意識して安全に登下校できるよう指導を行っていただきたい。

学校関係者評価総括

学校目標「笑顔あふれ、明日も行きたい学校」の通り、児童一人ひとりが安心し、笑顔で登校できるようにと、校長先生をはじめ、先生方が日々、学校運営や授業づくりにチーム一丸となって取り組まれている。また、「新しい時代に対応した教育の推進」として、情報活用能力のデジタル化の推進については、若い先生方を中心に積極的に授業づくりに取り組まれている。学校だけでなく、家庭、地域においても子どもをほめる機会を増やし、自尊感情を高めていくことに取り組んでいただきたい。

次年度に向けた重点的な改善点

①家庭、地域と連携し、基本的生活習慣、学習習慣の確立を行うため、児童への指導や保護者への啓発を引き続き推進する。
②不登校の児童に対しては、児童に寄り添った指導を行うとともに、組織的な協力体制、関係機関との連携を進め、不登校児童の減少に努める。
③保幼小の接続カリキュラム、小中一貫教育を推進することで、子どもの成長を支援する。
④今後も引き続き、学校運営協議会の協力を得ながら、望ましい職場環境の構築に努める。

自己評価の基準　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った